

第 1 回奥越地区魅力ある県立高校づくり検討会議 議事録

□日 時 平成 21 年 8 月 31 日 (月) 10:15～12:15
 □会 場 多田記念大野有終会館 2 階 202 号室
 □出席者 委 員：小野田委員、木戸口委員、阪井委員、高田委員（代理：ベネッセコーポレーション北陸営業所 中村氏）、但川委員、塚田委員、
 中川英之委員、中川眞委員、西川委員、橋詰委員、平沢委員、
 松田委員、山田委員、吉田委員、渡辺委員（15 名、五十音順）
 オブザーバー：福井県教育委員会 稲山委員
 □事務局 広部教育長、東村教育政策課長、小寺学校教育振興課長、小和田高校教育課長

○開 会

教育政策課長

それでは定刻ですので始めさせていただきますと思います。ただ今から、第 1 回目の「奥越地区魅力ある県立高校づくり検討会議」を開催いたします。皆様方には、お忙しい中、会議に御出席いただき、誠にありがとうございます。

また、委員各位におかれましては、本検討会議の委員就任を快くお引き受けいただきまして、重ねてお礼申し上げます。それでは、開会に当たりまして、広部教育長から御挨拶を申し上げます。

○教育長あいさつ

広部教育長

おはようございます。第 1 回となります「奥越地区の魅力ある県立高校づくり検討会議」に出席賜りまして、本当にありがとうございます。

奥越地区の県立高校の再編につきましては、皆様既に御承知のように、先年、高等学校教育問題協議会、高問協で答申をいただきました。いろいろ御議論をいただいたわけです。実は、今日の委員の中にも、高問協の委員をお願いして、協議に参加していただいた委員がいらっしゃいます。

今年の 3 月に、実際にそれを受けて、どのような形で再編していくかということ、私ども教育委員会としても結論を出しました。全県的な計画でございますが、特にその中でも、将来的な生徒数の落込みが激しい奥越地区については、すぐにでも手をつける必要があるということで、3 月一杯までに実施計画を策定いたしました。その後、今年の 4 月に入りましてから、実施計画に基づきまして、奥越地区の高等学校をどのようにしたらいいかということ、私どもも現場の校長先生方、学校の先生方ともいろいろ相談しながら、具体的にカリキュラムの話であるとか、具体的な詰めを今まで行っておりまして、

そんな中で、いろんな課題等も出てきております。それと平行しまして、勝山・大野地区の各高等学校の P T A、同窓会の皆さん方にもいろいろ御意見をお伺いしてまいりました。それから行政の方にも、いろいろ御意見をお伺いしてまいりました。そんな中で、後ほど説明させていただきますが、やはり、高問協の答申をいただいた、そういったひとつの枠組みもございますので、今後それをどうしていったらいいかということもいろいろ御意見を賜りたいと思います。

私どもも、この奥越地区の再編、それを他の地区のモデルとなるような、すばらしい奥越地区の高等学校、こういったことを是非とも実現したい、他の地区のひとつのモデルに、また参考になるようなものに仕上げていきたいということで取り組んでおります。

それで、中心となりますのは総合産業高校というひとつの枠組みになるわけですが、それと同時に、大野高等学校、それから勝山高等学校に普通科があります。

御承知のように、近年、福井の方への生徒の流出が、ひとつの大きな課題となっています。こういった点も含めまして、大野と勝山の普通科をどのようにこれから底上げ、レベルアップしていったらいいか、これもひとつの議題としてよろしくお願いしたいと思います。

それと、学力と同時に、スポーツ面についても同じようなことが言えるんじゃないかと思います。そういったこともありまして、勝山、大野の代表的な部活の先生にも参加していただいておりますので、そういった点も含めまして、より良い奥越地区の県立高校の再編となりますよう御協議いただき、それからまた、いろいろ御提言もいただけたらと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

○委員紹介

教育政策課長

それでは、委員の皆様を御紹介いたします。正面から50音順に御紹介してまいります。

大野市中学校校長会会長で、上庄中学校校長でもいらっしゃいます小野田委員でいらっしゃいます。

勝山高校教諭の、バドミントン部の顧問をされています木戸口委員です。

大野高校教諭で、スキー部の顧問をされています阪井委員です。

ベネッセコーポレーション教育研究開発センター特別顧問の高田委員にお願いしておりますが、本日は欠席のため、ベネッセコーポレーション北陸事業所の中村浩二様に、代理で御出席をお願いしております。

勝山市中学校校長会会長で、勝山南部中学校校長の但川委員です。

勝山南高校校長の塚田委員です。

福井大学副学長の中川英之委員です。

勝山高校校長の中川 眞委員です。

大野高校校長の西川委員です。

仁愛大学人間学部教授の橋詰委員です。

福井県高等学校PTA連合会理事で、勝山高校PTA会長の平沢委員です。

(藤井委員欠席)

県教育庁 学校教育担当企画幹の松田委員です。

県織物工業組合理事で、山一織物株式会社代表取締役社長の山田委員です。

福井県連合婦人会会長の吉田委員です。

大野東高校校長の渡辺委員です。

また本日は、福井県教育委員会委員の稲山様が、オブザーバーとして御参加いただいております。

最後に、事務局を紹介いたします。

学校教育振興課長 小寺です。

高校教育課長 小和田です。

私は、教育政策課長の東村です。よろしくお願いいたします。

○正副座長選出

教育政策課長

それでは、議事に入ります前に、本会議の座長ならびに副座長を選任させていただきます。

「奥越地区魅力ある県立高校づくり検討会議設置要綱」第4条によりますと、「座長は、委員の互選によってこれを定め、副座長は、座長が指名する」こととなっております。

そこで、まず、座長を御選任いただき、次に、座長から副座長を指名いただきたいと存じます。

それでは、座長の選任に入らせていただきます。選任の方法はいかがいたしま

しょうか。

橋詰委員 大変僭越でございますけれども、座長については、私の方から御推薦を申し上げさせていただきたいと思います。

「奥越地区魅力ある高校づくり検討会議」というのは、この奥越地域のみならず、県内広く注目される非常に大事な検討会になると思います。そこで、教育的な広い見識、経験のある、福井大学副学長の中川先生に是非お願いしたいと御推薦申し上げますが、皆さん、いかがでございましょうか。

教育政策課長 ただいま、橋詰委員から、福井大学の中川委員を座長にとの御推薦がございましたが、いかがでございましょうか。

《 各委員から「異議なし」の声 》

教育政策課長 それでは、異議なしのお声がございましたので、座長は中川委員にお願いしたいと思います。中川委員、よろしく願いいたします。では、正面の座長席の方へお移りいただきたいと思います。

《 中川座長、座長席に移動。 》

教育政策課長 それでは、中川座長から一言御挨拶をお願いいたします。

中川座長 今、この「奥越地区魅力ある県立高校づくり検討会議」の座長に指名いただきました。本当に光栄なことですが、橋詰委員の方から御紹介がありましたように、高校教育に関しての見識があるかどうかはちょっとわかりません。

高等学校も含めて、学校教育というのは本来、私は、保守的なものだと思っています。ただその中で、教育の内容であるとか、教育の方法であるとか、そういうものは、日々、教員が中心になって改善に取り組んでおられますし、そういうことは大いに進めるべきだと。ただ、教育体制というものに関しましては、基本的には保守的に構えるべきだと思っています。そういう意味で、あまり体制をいじるといとか、大きく変えるというようなことは、一般的にはあまり好ましくないと。

ただ、昨年度までの、高問協の答申にもありますように、福井県においては、高等学校の体制に対して様々な問題が生じてきていると。これまでずっと、ある一貫した体制でやってきているわけですが、そういうものを少し工夫するべき時代に来ている。特に高校生の人数の減少、それから高等学校の学習環境の向上、何よりも高校生が真に実力を付けられるような、そういう学習環境を構築していくためには、どういう風な体制に持っていくのがいいのか、というようなことで提言が行われていると思っています。

この検討会議は、その答申の結果を受けまして、具体的に、まず奥越地方から魅力ある県立高校づくりというものを始めていくということですので、皆様の御意見、様々な方面からの御意見をいただき、それをまとめる形で最終的に作り上げていく手助けをしたいと思っておりますので、どうかよろしくお願いします。

教育政策課長 ありがとうございます。では、中川座長から副座長の御指名をお願いしたいと存じます。

中川座長 それでは副座長ですが、これは座長の方から指名することになっております

が、副座長としましては、福井県教育庁の松田企画幹にお願いしたいと思っております。御了承をよろしくお願いします。

教育政策課長

それでは、議事に移らせていただきます。

資料の確認をさせていただきます。まず、横長の協議資料1、それから縦長の協議資料2「県立高等学校再編整備計画」、それから協議資料3「奥越地区魅力ある県立高校づくり検討会議について」、それと大野東高等学校の校舎の配置図、以上が資料でございます。遺漏はございませんでしょうか。

それでは、以後の議事進行は、中川座長にお願いしたいと存じます。よろしくお願いいたします。

○現況説明

中川座長

それでは、早速、協議を始めたいと思います。まず、県立高校再編整備のこれまでの経過、奥越地区の県立高校の現況等について、事務局の方から説明をお願いします。

高校教育課長

それでは、奥越の県立高校の現状等について御説明します。

協議資料1の1ページをおめくりください。これまでの経緯が書かれております。平成19年12月から平成20年9月に計8回、高等学校教育問題協議会が開催されました。平成20年の10月に答申が出されました。答申につきましては3点ございまして、職業系専門学科の在り方、定時制・通信制課程の在り方、学校規模・配置の在り方でございます。職業系専門学科の在り方につきましては、特定の専門分野に特化した拠点校の設置、幅広い専門分野を学べる総合産業高校の設置、ものづくり・食育など、本県の特色を生かした新しい学科の設置などが述べられております。定時制・通信制課程の在り方につきましては、昼間二部制の見直し、単位制・2学期制の導入、教育相談体制等の充実が述べられております。学校規模・配置の在り方につきましては、1学級当たりの望ましい生徒数を36人程度、1学年当たりの望ましい学級数を4から8学級程度、各地区における全日制高校の望ましい配置について、奥越地区においてできるだけ早い時期に学校の配置の検討が必要であると述べられております。

答申を受けまして、同じく平成20年10月に「新しい県立高校の在り方検討会」が設置されました。また、平成21年2月13日に県立高等学校再編整備計画案が公表されております。その中で、第1次実施計画といたしまして、奥越地区の全日制高校の再編整備、定時制・通信制課程の見直しが述べられております。21年の2月20日から3月6日にかけて、計画案につきましのパブリックコメントを実施いたしました。応募状況は、95名の方から応募をいただいております。21年3月24日にパブリックコメントの結果報告・協議を第898回教育委員会でなされました。21年3月30日、県立高等学校再編整備計画が、第899回教育委員会において決定いたしました。

この計画につきましては、協議資料2を御覧ください。1ページ目に「再編整備の基本的方針」の中で、再編整備の必要性が述べられております。本県の場合、中学校卒業生の高校への進学率が98.5%と非常に高いという点、生徒の興味関心等が多様化する一方で、不本意入学などによる学習意欲に乏しい生徒、不登校経験のある生徒など、様々な課題を抱える生徒が増加しているという点、中学校卒業生数が平成元年3月の13,483人をピークとして減り続け、平成34年の3月には7,208名という形で、ピーク時の約半数にまで減少するという点、それらを踏まえまして、生徒がより良い環境で、より充実した高校生活を送ることができる教育環境を提供するために、早急に取り組んでいかなければなら

ないというのが再編整備の必要性として述べられております。

2 ページ目には、適正な学校規模・配置が述べられております。全日制高校につきましては、1 学級の生徒数を普通科は36名程度、その他の学科は30から35名程度を基本とするということ。1 学年当たりの学級数は、4 から8 の学級数を基本とし、可能な限り5 学級以上を確保するという。定時制高校につきましては、在籍生徒数が減少する中で、配置の見直しを検討するというところでございます。

続きまして、職業系専門学科の再編整備につきましては、拠点校となる専門高校の設置、これは職業教育のセンター的な役割を担うと述べられております。また、複数の異なる職業系専門学科を併設する総合産業高校の設置につきましても述べられております。

6 ページ目をおめくりください。定時制・通信制課程の見直しといった形で、就学体制の見直し、教育内容の充実、そして課題を抱える生徒への対応、通信制課程の見直しの4 点が述べられております。就学体制の見直しにつきましては、新たな昼間制への移行、単位制の実施、2 学期制の実施等でございます。教育内容の充実につきましては、学外学修の単位認定、専門教科の科目の設置、専修学校等との連携の拡充でございます。課題を抱える生徒への対応につきましては、教育相談体制の充実、少人数学級の導入、特別支援学校との連携等でございます。

10 ページ目をおめくりください。第1 次実施計画の中で、奥越地区の全日制高校の再編整備が述べられております。まず、現状と課題といたしましては、中学校卒業者数が、昭和63 年3 月の1, 187 人をピークとして、平成20 年には688 人にまで減少し、ピーク時の約42%の減になっているということでございます。これは、平成34 年には444 名まで減少になるというふうになっております。

再編整備の進め方につきましては、13 ページ目に、現行の高校と学科、そして下の方に再編後の学校と学科名が載せられております。大野東高校と勝山南高校につきましては、総合産業高校、仮称でございますけれども、再編整備をする。工業、商業、福祉、家庭の4 つの専門学科を基本に教育体制を整備すること。工業科につきましては、機械科と電気科を置くということ。そして衣食住、福祉サービス分野の基本を総合的に学ぶとともに、介護福祉士、調理師等の資格取得にも対応した生活福祉科を新設し、コース制を導入するということなどが述べられております。

また、12 ページのところには、大野高校と勝山高校のことが述べられておまして、両校とも奥越地区の進学校として教育内容等の充実を図る、勝山高校については、情報化社会に主体的に対応できる情報コースを設置するということが述べられております。再編整備計画の概略について御説明いたしました。

協議資料1 に戻っていただきたいと思います。2 ページ目以降に奥越地区の現況の表がございまして、表の見方を御説明申し上げます。まず、2 ページ目ですけれども、申し訳ありませんけれども、訂正をお願いいたします。一番左側のところ、平成3 年期になっておりますけれども、これ平成8 年期、3 を8 に御訂正をお願いいたします。一番左側の、大野市、旧和泉村を含む、その次に「平成3 年期（人数）」となっていると思うんですが、3 のところをすべて8 に訂正をお願い申し上げます。

それでは、表の見方を御説明申し上げます。まず、一番上の大野市のところを見ていただきますと、平成8 年3 月中学校を卒業した生徒が586 名、21 年3 月卒業生が393 名、そして368 名という形で、中学校を卒業した子どもたちの数がこのように変化していくということでございます。

3 ページ目を御覧ください。県立高校の定員数の推移でございます。一番上の

大野高校で御説明させていただきます。平成8年のところで、1学年当たりの定員が345名であったと。当時の学級数は9クラスございまして、1学級当たりの生徒数は38.3名であったと。これがずっと動きまして、平成21年には1学年の定員が213名になり、学級数が6、1学級当たりの定員が35.5になっているというふうに御覧ください。

続きまして、4ページ目を御覧ください。高校生の通学状況でございます。大野市、勝山市の方から福井市内への通学状況でございます。福井市内の県立高校への通学につきましては、平成20年度の県立計のところに、50となっております。ですから、50名の生徒が福井市内の県立高校へ流れていると。福井市内の私立高校には、平成20年度には56、56名が流れていると。合計いたしますと、106名の生徒が奥越地区から離れていっているという数字でございます。大野市と勝山市、相互にどれくらい動いているかというのが下の表でございます。大野市から勝山市内の県立高校に動いている生徒たちは、平成20年度は31名、勝山市から大野市へ流れている生徒は、平成20年に30名でございます。

続きまして、5ページ目を御覧ください。県立高校の卒業生の進路状況でございます。これも表の見方を大野高校普通科全日制で御説明いたします。最初の区分は、19年、20年、21年の卒業生ということでございます。21年の9月の中学生の進路志望状況調査が226名あったということでございます。21年度の高校の入学定員が213名、入学した子どもたちが213名、そして21年の卒業生は219名であったと。219名の内訳が、進学は214名、就職は5名ということでございます。進学につきましては、大学、短大、専修等に分けてございます。就職につきましては、地区別、県内・県外、業種別、職種別に分けてございます。

6ページ目と7ページ目を御覧ください。大野東高校と勝山南高校でございます。表の見方は大野高校と同じなわけですがけれども、今現在、再編整備計画では、大野東高校の機械システム、そして電気科、そして福祉教養科、これを1クラスずつ残す形になっております。勝山南高校では、生活経営科、商業科の中で1クラス。機械科1クラス、電気科1クラス、福祉教養科のところで1クラス、生活経営科のところで1クラス、商業科のところで1クラスと、概略で申しますと、こういう形で残す形になっております。表の見方は、大野高校と同じような形になっているというふうに御覧ください。

8ページ目を御覧ください。県内の事業所・従業員数等を調べてございます。4番目に大野市がございまして。大野市で従業員数が一番多い業種は製造業でございます。製造業、卸売・小売業、そして建設業の順番になっております。5番目のところに勝山市がございまして。やはり多いところでは、製造、卸売・小売、そして医療・福祉という形になっております。以上でございます。

中川座長

はい、ありがとうございます。今、再編整備のこれまでの経緯等を説明いただきましたが、本日の検討会議には、奥越地区の県立高校の校長先生方に委員として御出席いただいております。それぞれの高校の現状と課題について、各校長先生から御説明をいただきたいと思っております。

まず、大野高校の方からお願いします。

西川委員

それでは、大野高校の現状につきまして、簡単に御説明申し上げます。資料としまして、学校案内のリーフレットを用意いたしました。よろしく願いいたします。大野高校の一番の自慢は、地域に根ざした伝統と環境のすばらしさでございます。課題としましては、今も説明がありましたが、生徒数の減少が一番に挙げられるかと思っております。

まず、本校の沿革について少し御紹介申し上げます。明治34年に大野城二の丸の地において、県立福井中学校の大野分校が開学しました。そして、その4年後、明治38年4月1日に、県下第4番目の県立大野中学校として独立開校することができました。そこから数えまして、現在104年目に当たります。伝統校であります。あの有名な竹内均東京大学名誉教授も、昭和12年に大野中学校の第4期修了と記録にございました。昭和23年の学制改革により、大野中学校、大野高等女学校、大野農林学校が合併し、現在の福井県立大野高等学校が誕生しました。昭和31年には、三好達治により校歌が作詞されております。平成5年に新庄地区に移転新築、県下に類を見ないような規模と施設を備えた学校となり、現在に至っております。全日制課程と定時制課程を併設する普通科高校であります。図書館の耐火書庫の中には、大野藩の藩校、明倫館や洋学館の頃から受け継がれております、学術的に価値の高い和漢洋書が多数保管されております。

次に、生徒の状況について御説明いたします。まず、全日制について御説明いたします。各学年6クラス、654人の生徒が現在在籍しております。平成5年の移転新築時の生徒数は、964人おりましたので、この15年間で310人が減少したことになります。生徒の92.5%が大野市内の中学校からの入学生であります。平成16年に高校入試の学区・学校群制度が廃止されて、大野市から藤島高校や高志高校に進学する中学生が毎年10人程度、高専に10数名見られるようになってきております。生徒の進路先は、4年制大学64.3%を中心に、短期大学が9.6%、専修学校が16.9%、就職等が2.3%と多様でございまして、一人ひとりの進路希望の実現を図るために、6クラスを文Ⅰ・文Ⅱ、理Ⅰ・理Ⅱの4つのコースに分けて、柔軟な教育課程を編成し、指導に当たっております。教育課程および卒業生の進路状況の詳細につきましては、リーフレットに詳しくありますので、御覧ください。

次に、定時制の生徒の状況についてですが、現在各学年で、Aコース・Bコースの昼間二部制をとっております、8クラスございます。全生徒数は46人、単純に平均しますと1クラス6人程度でございます。平成5年度には、130人在籍していたという記録がありますので、この15年間で生徒数が3分の1に減っております。83%が大野市内の中学校出身であります。就業状況につきましては、食品関係の販売を中心に、70%の生徒が働いております。平成20年度の卒業生の進路状況は、先ほども説明がありましたが、進学が2人、就職が10人、ほか2人というようになっております。大野高校の部活動の現状につきましては、阪井教諭から説明いたします。

阪井委員

では、今ほどのリーフレットの裏面を参考にしながら、部活動の現状ということで、お願いいたします。

平成21年度、大野高校では、部活動として17の運動部、卓球が男女、バスケットボールが男女、バレーボールも男女、バドミントン男女ありますので、17の運動部。それから8つの文化部、6つのサークルが毎日熱心に活動しております。生徒の加入状況は、約9割になっております。部活動の実績とありますが、県内トップレベルの部活動が多く、近年では、男子バレー、女子バドミントン、女子バスケットボール、男女卓球、弓道、陸上、サッカー、野球、囲碁・将棋などでは県内のベスト4以上の成績を残した部があります。また、陸上、卓球、吹奏楽部、囲碁・将棋、書道、文芸、水泳、水泳は個人で出場ということになりますが、それからスキーなどが北信越、それからインターハイなどの出場を果たしております。特に今年度、春季総体で、男子卓球部が初優勝という形でインターハイに出場しております。吹奏楽部も、今年度、中日、全日の県予選にて金賞、北信越大会で銀賞と優秀な成績を収めました。一方、生徒数の減少などに伴い、

登山部の休部、それからソフトボールにおいては、単独チームとして大会に出場することが困難な状況であるというのが問題になっております。以上、部活動の現状でございます。

中川座長

それでは、次に、勝山高校中川先生の方からよろしくお願いします。

中川委員

勝山高校でございます。よろしくお願いいたします。勝山高校は、昭和23年に開校して、現在63年目です。開校当時、普通科、家庭科、商業科、農業科、定時制がありましたが、生徒数減により徐々になくなりまして、現在は普通科のみでございます。

資料としまして、お手元に「響きは空に」というパンフレットと「勝山高校つうしん」という、A4版のカラー刷りのプリントがございます。そのパンフレットを1枚めくったところを見ていただきたいのですが、そこに、教育課程、クラス編成の部分がございます。そのところを御覧になりながらお聞きいただきたいと思います。勝山高校の現在のクラス数は、1年生が4クラス、2年生が4クラス、3年生が5クラスでございます。合計471名の生徒数でございます。その内訳は、ほとんどが勝山市内の中学校から来ています。それ以外は、大野、永平寺、上志比、それから福井市です。471名のうち、25名は勝山以外から、残りが勝山市内からということでございます。

勝山高校は、大変学力差が大きい生徒たちが集まっております。そのため、習熟度別のクラス編成を行っております。教育課程とクラス編成を御覧いただきたいのですが、1年生は、3段階の習熟度別クラス編成をしております。2年生、3年生は、文系・理系というように希望が分かれてまいります。その文理別のクラス編成をしておりますので、文理Ⅰとか、文理Ⅱとか、要するに文系・理系が混ざっているクラス編成になっております。その結果、進学率は年々向上してきておりまして、昨年で申しますと、4年制大学が68.6%の進学率でございます。そのうち、国公立大学には40.7%が行っております。福井県内の高校の中では結構高い率ではなかろうかと思っております。そのほか、部活動も、後で話をさせていただきますように、活発に活動しております。

勝山高校の課題でございますけれども、これは大野高校さんにもありましたように、福井市内の方へ進学していくという生徒が少なからずいることです。私も、地元の生徒は地元で育てるという気持ちで、なんとか勝山高校の方に向いてくれないかなと思っているところでございます。福井市内へ進学していく理由は、大学への進学のためだと思います。中学生の保護者、中学生が誤解をしている部分があるように思います。決して、勝山高校が進学の指導において福井市内より劣るわけではございません。勝るとも劣らないというふうに自負をしております。十分、勝山市内で大学進学ができるんだということをわかってらっしゃらない。これはわかってもらわなければいけない。それと、子どもは、都会といいますが、街中に行きたいなどという気持ちがあるのかもしれませんが、そのところは、お金をかけて、時間をかけて遠いところに行くよりは、もっと、部活動でも読書でも、そういうところに時間を取ってやった方がよほど実がありますよと、だから実をとりなさいということも宣伝していかなければならないということを考えているところでございます。

それでは部活動につきましては、木戸口の方から説明申し上げます。

木戸口委員

現在の勝山高校の部活動の状況について説明させていただきます。生徒の部活動の加入率ですけれども、全体で約9割程度になります。学年が上がるにつれて若干率は落ちますが、全体でいうと9割程度です。また男子の方ですと、そのう

ちの9割が運動部、1割が文化部。女子であれば運動部と文化部が半々程度になります。ただ、マネージャーも運動部としてカウントしていますので、実際に運動を行っている女子の部員というのは4割程度になるかなと思います。

それで、活躍については、「勝山高校つうしん」にもありますように、陸上部、スキー部、バドミントン部、これらは全国大会に行き、上位に入賞する生徒も出てきています。また日本文化部、太鼓ですけれども、これも全国で上位の賞をいただいています。また、男子バレーボール部やテニス部、吹奏楽部についても、県で上位の成績を収め、それぞれ上位の大会に進んでいます。加入可能な部活動の数ですけれども、男子の運動部では10、女子では7、文化部は男女とも入れるのですが、5つというように、この数は7年くらい前の数に比べると、男子の運動部では3つ精選をして現在の10の数になっています。女子は4つ精選をして7、文化部については、6つ精選をして5という数になっています。これはやはり、生徒数減に伴って、部員数の確保が非常に困難になってきているということで、このような数になっております。以上です。

中川座長

はい、ありがとうございました。続きまして、大野東高校からお願いします。

渡辺委員

大野東高校です。学校案内というパンフレットがあるので、それをお出しください。学校の説明は5分間程度ということなので、1点目は沿革、2点目は学科紹介、3点目は進路と、3点に絞って説明をしていきます。

まず1点目の沿革ですが、これは学校案内に載っておりませんので、口頭で説明します。昭和40年、44年前です。新しく学校ができました。大野工業高等学校、今の東大野の前身の学校が、今から44年前にできました。その当時、土木・電気・機械の3つの学科ができました。土木が1、電気・機械が2、5クラスの学科が工業高校にできました。この頃、春江とか武生工業などが同じようにできています。それから平成3年、今から18年前に新しい学科が加わりました。情報、福祉。元にあった土木、電気、機械はそのまま、それに情報と福祉が加わりました。電気・機械がマイナス1で、5クラスになりました。それから平成8年、13年前になりますが、このときに4クラスになりました。どのように4クラスにしたかというと、機械・電気はそのまま残る、そして福祉も残る、そして情報と建設を合わせて情報・建設科という形で4クラスになりました。学校の名前は、平成3年、18年前に福祉教養科ができたときに、工業高校というのでは不適當ですから、大野の東にあるということで大野東に変えた、それが今までずっと続いているところです。

それでは、沿革を終わりました、学校案内を開いてみますと、今言った学科が書いてありますが、専門高校というのは、普通科の科目を6割やります。あとは専門の教科をやる、そういうような、ちょっと特殊な学校です。5つ書いてありますが、機械システム科、これは昭和40年当初からあると。一番上の絵はアームロボットを操作しているところです。それから2番目は電気科、電気科も昭和40年当初から残っている学科で、一番上の写真は、WROのロボットをつくっているところで、真ん中に書いてあるのは電気工事士の授業です。一番下は強電の実習で、この台の後ろにモーターや発電機があります。それから次、3番目ですが、情報・建設科。これは、情報と建設が平成18年に合併して1クラスになったものです。情報コース、上の写真は電気の実習、2番目は信号機の実習、1番下はパソコンの組立てをしているところです。それから建設コース。これは情報と建設で1クラスで、入学した後2つに分かれます。1番上のトンネルが載っている絵は、中部縦貫道の上志比～勝山間のトンネルで、3月に完成しました。真ん中の写真は建設機械実習、3年生はこの建設機械の免許を皆持っておりま

す。3番目は清滝川の測量。最後になりますが、福祉教養科は平成3年に設置された学科で、一番上の写真は口の中を清潔にしている、スポンジの綿棒みたいなもので、口の中を清掃しています。真ん中は寝たままの人をお風呂に入れる実習、3番目、一番下は電動ベッドの操作実習をしております。

最後に進路状況ですが、これは口頭で言います。進学と就職は、例年大体ほぼ半々です。進学は4年制の私立大学と専修学校が主です。就職は、県外に行く生徒が2割くらい、後は県内の就職で、県内の就職者は奥越が6割で、福井市内が4割の状態です。以上で説明を終わります。

中川座長

はい、どうもありがとうございました。続きまして、勝山南高校の方から願います。

塚田委員

それでは勝山南高校、よろしくお願いいたします。まず、本校の沿革についてから御説明いたします。昭和17年に、勝山兄弟合資会社の経営の元、私立の学校として開校いたしました。昭和29年に、勝山兄弟合資会社が経営を断念いたしまして、福井県に移管されて、そのときから公立の学校としてスタートいたしました。そのときに名前を「福井県立勝山精華高等学校」と改称しております。その後、平成元年に、今の本校であります、「勝山南高等学校」として改称して、今年で21年目を迎えています。

次に、設置学科につきまして御説明いたします。本校は商業系の学科が2つ、情報科と経営実務科、そして家庭系の学科が1つ、生活経営科、計3学科を有しています。情報科は、コンピュータによる情報処理の学習に重点を置く商業系学科で、これからの産業界が求めるコンピュータに強い人材を育成することを目的としております。経営実務科は、企業の経営に必要な知識と技能、そしてビジネス文書作成技能を学習する商業系学科で、販売、事務の分野のほかサービス産業、地場産業などで活躍できる人材を育成します。3番目の生活経営科は、調理や食物などの学習を中心とする家庭系学科で、食文化だけでなく、被服製作にも力を入れています。一般の就職分野のほか、生活関連産業に就職できるようにするとともに、現代にふさわしい家庭経営能力を身に付けます。全校生徒は現在188名で、少子化に伴い毎年減少しているといった具合です。本校の開校当初は、450名ほどおりましたが、450名から漸次減少いたしまして、現在188名です。進路につきましては、進学者と就職者はほぼ半数ずつです。進学者の大部分が専門学校へ進学し、就職者の大部分は地元の奥越地区に就職しています。

最後に、教育活動について説明いたします。まず、学習指導ですけれども、本校の生徒は学習に対する自信に乏しい面が多く見られ、これは本校の課題でもあります。そういったわけで、習熟度別授業、少人数授業、T・T授業を専門教科で約9割、普通教科で約5割取り入れ、一人ひとりに応じたきめ細かな指導体制で学習内容の理解を図っています。また、今年度から、第1学年に取り入れえました学校設定教科、この授業では、教員3人による指導の元、国語・数学・英語の中学校の既習範囲を復習しています。次に特別活動ですが、地域に出向いたり、地域の活動に積極的に参加したりしています。全校生徒が、弁天川原やえちぜん鉄道の勝山駅の清掃奉仕活動、それからバトン部が大野市の名水マラソン大会での演技披露、それに奥越のJA祭りのオープニングでの演技披露をしております。また、商業科と家庭科が、奥越のJA祭りでブースを出展して、本校の紹介をしております。ボランティア部が勝山市内での行事の手伝いをしております。部活動におきましては、文化部の演劇部の活躍が最近著しく、中部日本高校演劇大会で、昨年度、文部科学大臣賞を受賞して、今年度の8月1日に、四日市で行われました全国高校演劇大会に出場しました。以上です。

○質疑応答

- 中川座長 それでは、これまで説明いただいたことについて御質問等がありましたらお願いいたします。
- 橋詰委員 福井市の学校へ進学する生徒が少なからずいるということですが、交通手段とか、通学するとき、進学であれば藤島高校、高志高校とか、そういうところへ行っているのではないかと思います、かなり交通機関を利用するのは大変だろうと思います。通学の実態がわかったら教えてほしいと思います。
- 中川委員 勝山の場合には、えちぜん鉄道がございますので、駅に近いところとか比較的福井市に近い中学校ほど福井市に通う生徒が多いです。福井から遠い学校ほど少ないようです。電車で行っているんだと思います。
- 中川座長 大野の場合はどうでしょうか。
- 西川委員 大野はJRが多いと思います。
- 橋詰委員 経済的な負担もかなりのものですね。
- 中川委員 多いと思います。時間もかかります。
- 橋詰委員 最近よく見かけるんですけれども、親御さんがかなり、自動車で、学校や最寄りの駅まで送迎をするケースが多いと思うがそういったことはありますか。
- 中川委員 例えば、福井へ勤めている親がであれば、仕事に行くついでに一緒に乗せていく場合はあるかと思いますが、ただ、いつもそれが一致するとは限らないので、学校のことで遅くなったり、朝早く行かなければならないとか、そんなにはなかなか対応しきれないと思っています。
- 橋詰委員 ほとんどが公共交通機関を利用して福井市内の学校へ行くということですね。それで、かなり時間的なロスがありますね。朝早く学校へ行かなければならない、電車の本数が少ないですから、帰りも大変だと思いますが、それでも生徒が増えているという可能性が強いですか。
- 中川委員 両手ぐらいだと思います。
- 中川座長 中学校の校長先生の方から。統計上はだいたい一定のように見えますが。
- 小野田委員 中学校では、合格可能性より子どもの進路がかなえられる進路指導をということを合言葉にしています。従いまして、最終的には、地元の高校に行くか福井方面へ進学するかは、生徒、そして保護者の選択となる傾向がだんだん強くなっている思いがします。私も大野の人間で、地元活性化のために残って欲しいという願いもあるが、なかなか現場の指導では、担任や学年主任がそういう風に方向付けるようなことは難しい現状になっています。
- 但川委員 勝山ですが、先ほど中川校長先生が言われたように、福井よりの勝山北部中、中部中、南部中と3つあるわけですが、私が4年前に中学校に戻ったときには、福井の高志高校、藤島高校等への志願が結構ありました。そのなかで、勝山高校

の校長先生方と色々な話をしていく中で、高校側も、やはり残ってほしいということで、大分いろんなことで働きかけられまして、今PTAの代表の方もおいですが、まず私は、高校側の保護者の方が、中学校の保護者の方にPRの中身をもっと伝えていただく方法が一番じゃないかなということで、3年間そういう話もしてまいりまして、現在、私の学校では、昨年住所を移した生徒の一人が、福井の方の高志高校の方に行きました。去年はゼロでしたが、現状では、群を1人希望しておりますが、年々減っています。そのなかで今お話がありましたように、それから学校までのいろんなことで立地的なこともあります、2時間以上はかかるという話もしながら進路指導をしてきた経過があるわけです。

やはり、生徒の志望、希望でどうしてもそこでやりたいという意向は大きかったと思います。他の2中学校の校長とも話をしていますが、ある程度の指導まではできますが、最終的には本人と保護者の意向で、どうしても最終的にストップまではかけられないだろうと、話をしております。今ほどお話のありました、勝山駅までは、ほとんど車で送迎が多いように感じています。ただ1点、スポーツ系の福井の私立へ行っている生徒については、いろいろ免除等もありまして、ある程度経費の負担減も一部ございます。しかし、そういう保護者の負担というのは、これからの再編に際しても、そのことが勝山から大野へということが、私は、少し懸念をいたしておるところでもございます。

○論点説明

中川座長

それでは、本会議の論点について、事務局の方から説明願います。

高校教育課長

それでは、協議資料3を御覧ください。まず本検討会議でございますが、2ページ目に組織図がございます。一番上が本日開かれております検討会議です。それを元に3つの専門部会を置かせていただき、大野高校検討部会、勝山高校検討部会、新高校検討部会、この3つの検討部会で各学校の個別事項につきまして検討させていただき、そしてその内容について本委員会で検討していただく形となります。

それでは、本日御審議いただきたい主な論点について御説明いたします。大きく4点ございまして、ひとつは総合産業高校における教育内容の充実について、普通科高校の教育内容の充実について、そして学習活動や学校行事、部活動、各学校共通の課題について、施設・設備の充実についてでございます。

3ページ目をご覧ください。まず、工業系学科についてですが、先ほど3月30日の再編整備計画の11ページには、「工業科は工業の基礎的分野である機械科と電気科を置く」という文言になっております。協議資料1の6、7ページを御覧ください。6ページ目に大野東高校の現状、7ページ目に勝山南高校の現状があります。これを踏まえまして御説明いたします。再編整備計画では大野東高校の機械と電気科です。工業科は機械科と電気科を置き、機械のところでは30名、電気のところでは30名というような文言になっています。それにつきまして、いろいろな課題がございます。

まず、大野東高校の情報・建設の建設コースが今問題になっております。まず、再編整備計画策定に当たって実施したパブリックコメントやPTA、同窓会から、建設コースの存続を求める御意見がございます。また、奥越地区の事業所の数、従業者の数を見ると建設業の割合が高く、建設業は奥越の主要産業といえるという指摘がございます。そのなかで、情報・建設科の建設コースの入学者と卒業者を御覧いただきたいわけです。建設コースの生徒数は、入学者が14名、9名、10名と減少して小規模化が進んでいる点。近年3ヵ年では、建設業についた生徒は毎年2～3名である。就職区分の建設のところをみると、19年度が3

名、20年度が3名、21年度が2名で、かつこ内は奥越で就職した子どもたちでございます。また、他の工業系学科からも建設業に就く生徒があるということ、機械、電気科等で建設に入っている子どもたちがおります。ただ、建設業の割合が多いという点、PTA、同窓会などからも建設コースの存続が求められている点をいろいろお含みいただいて御審議をよろしくお願ひしたいと考えております。

ただ、生徒の総枠につきましては、新しい学校では5つのクラスができるわけですが、30人×5クラスで150名を予定しております。ですから、工業科の子どもたちは、30×2で60名の入学者を予定しております。この60名をどのような学科に割り振るのかということを念頭において御審議いただければと考えております。

2つ目でございます。再編整備計画のところで、「衣食住、福祉サービス分野の基本を総合的に学ぶとともに、介護福祉士、調理師等の資格取得にも対応した「生活福祉科」を新設し、コース制を導入する。」という文言がございます。これは、大野東高校の福祉教養科、勝山南高校の生活経営科、この2つが話題になっているということでございます。現状と課題について申し上げます。まず、家庭学科については、食だけでなく被服などの内容を取り入れることで、教育効果を高めている学校が多いということ。勝山南高校生活経営科においては、食物、被服の実習を中心に、興味のある専門科目の知識・技術を身につけることを通じて、勉強することの楽しさや意義を期待し、学習に意欲的になる成果を挙げているという点でございます。

1ページおめくりください。県内家庭学科の卒業生の進路を見ると、卒業者の約58%が進学しており、そのうち8割が関連学科への進学をしていること。家庭学科で学んだことを生かしてさらに上級学校に進み、それぞれの資格をとる傾向が強いという点です。

ここで問題になっていることを4ページの表にまとめました。基本的には、食文化コースに調理師養成課程を設置するかしないかということです。食文化コースにつきましては調理師養成課程を設置した場合のメリット、デメリット、そして設置しない場合のメリット、デメリットをその表にまとめております。まず、設置した場合のメリットは、国家資格が取得できること、職業系高校としての魅力向上につながることで、などが挙げられます。デメリットとしては、指定される専門科目を31単位設置することにより、他の分野の教育課程を置く余裕が無くなる、少なくなる。生徒が興味関心に応じた科目を選択することが難しくなるのではないかと、そして就職にあたり、毎年30人近い調理師の資格取得者の需要が果たして社会にあるかという点です。養成課程を設置しない場合です。メリットとしては、生徒が興味・関心に応じて被服や食物を選択することで生徒の学習意欲を高めることができるのではないかと、という点です。デメリットとしては国家資格が取れず、民間資格のみになる点です。

続きまして5ページ目をご覧ください。普通科系高校における教育内容につきまして、再編整備計画では、「勝山高校に情報化社会に主体的に対応できる人材の育成を図るため、普通科に高度な情報科学学習を行い理工系・情報系大学への進学を目指す情報コースを設置する」とあります。現状と課題につきましては、大野東高校と勝山南高校の再編統合に当たり、勝山市内の県立高校は1校になってしまうという現実がございます。普通科におけるコース設定については、今後の生徒数の推移や通学状況、地域の実情を踏まえながら望ましい在り方の検討が必要なのではないかという指摘がございます。以上でございます。

○意見交換

中川座長

ありがとうございました。それでは委員の方々から御意見を伺っていきたいと思います。論点でいくつか説明されましたが、大きなところのひとつは総合産業高校。それから普通系の高校に関して勝山高校の方に情報コース、これは職業系というわけではなく、将来は高度な情報科学の方面で大学等への進学を目指すコースということのようです。

まず委員の方から自由な御意見を伺いたいと思います。

平沢委員

先ほど通学の話が出ましたが、その点について、保護者の立場からもう少しお話をしたいと思います。個人的なことで申し上げますと、私の子どもは長男が私立の高校に通っておりました。2番目は勝山高校をこの春卒業し、3番目は現在も勝山高校にいます。1つ目ですが、なぜ福井の方に通うのか。親の立場からしますと、親も子どもも普通科高校、特に高志、藤島に対する憧れというか、高志、藤島に行けば、より有名大学にいけるといような思いがあるのは事実だろうと思います。実は私自身も、2人目の子どものときには、本人が高志高校のオープンキャンパスに行きたいというので行かせていますし、私自身もそんな気持ちを抱いたことは事実でありますし、私の同僚の保護者も同様な話をしておりました。

南部中学の校長先生からお話がありましたが、勝山市内あるいは大野市内、奥越の高校が、どういう高校なのかとか、その魅力が何なのか、実はよくわかっていなかったような気がいたします。今、子どもが勝山高校にいますので、勝山高校の良さ、あまり悪い点は無いですが、わかっていますし、ようやくやはり勝高に来てよかったなという思いになっています。はじめてのお子さん、勝山高校や大野高校に通わせたことのない親御さんからすれば、とにかく福井に行けばもっと将来が開けるという思いがあるのではないかというのが1点あります。それとお金がかかっても、というところですが、私の長男は私立だったのでそういう意味でもお金がかかったのですが、やはり、時間と通学方法が欠点。朝は6～7時前には家を出て送っていかないといけない。特に冬場は雪が多くて、家の前には除雪がなかなか来ないので自分で雪をのけて通わないといけない。多分お家にもよると思いますが、5時台には除雪をして駅まで送っていくような御家庭が現実あるかと思います。ですから、かなり負担が大きいというのは事実かと思えます。先ほどの御質問に関しては、奥越の高校の魅力が十分届いていれば奥越の高校に留まりたいという親御さんも増えるのではないかと思います。

中川座長

大野高校も勝山高校も、国公立大学への進学は、データで見せていただきますとかなり出ているので、そのあたりをもっと宣伝されたらいいのではと思います。

平沢委員

質問ですが、勝山高校に情報コースを設置することについてですが、よく親御さんから、情報科と情報コースとどう違うのかと聞かれます。どうとらえて理解すればよろしいでしょうか。

中川座長

あくまで普通科で、普通科の中に情報コースをつくるということでしょうか。説明をお願いします。

高校教育課長

再編整備計画では、13ページを見ていただくと分かるように、あくまでも学科は普通科でございます。普通科の中に情報コースという形で、1年生で普通科に入りまして、2年生で文理分けをしていく中で、文系、理系、情報系という形

でとらえさせていただいています。

平沢委員

協議資料2の12ページに、「普通科に高度な情報科学学習を行い理工系・情報系への進学を目指す情報コース」と書かれてはいるのですが、あまりカリキュラムのことは分かりません。情報コースの授業をしつつも、大学進学を目指すカリキュラムというのは大丈夫なのでしょうか。国公立への進学にも大丈夫なカリキュラムが組めるのかどうか、お聞きしたいと思います。

中川座長

カリキュラム構想はある程度進んでいるのでしょうか。

中川委員

カリキュラムにつきましては、大分時間をかけて検討をしているところですが、結論から申せば、可能であると考えております。確かに、大学入試科目に情報の科目があるわけではないですが、大学に進学する方法としては、推薦入試もあればAO入試もあります。それらの入試ではプラスになる点がありますし、根本に戻って考えますと、入試に必要なでない科目は他にも一杯あるわけです。どの学校も情報の2単位は行っておりますし、家庭科、保健体育、芸術などは入試科目としてほとんどありません。大学へ進学すればいいのではなく、進学してどうかということも考えていかなければならない。情報化社会ですから情報のある程度勉強していくことも、進学してからプラスになる面は多々あるだろうと思っています。科学技術高校から国公立へ行った生徒と普通科から行った生徒とでは、アルゴリズム的な考え方において差があるということを聞いております。

中川座長

いわゆる職業系の情報コースとはニュアンスが違っていて、普通科で通常の大学進学に対応しながら、情報系の基礎的な学習、特にソフト系と私は思っているのですが、カリキュラム構成がどうなっているか分かりませんが、我が国にとっては非常に重要な分野になっていくと思います。われわれの大学にも現在、情報系の学科が2つ、「情報メディア工学科」と「知能システム工学科」というものがあります。そういうところに、職業系の情報をやってきた人が、主としてAO入試で入ってきて、大学で非常に活躍しているという例があります。もう少し、実用上の情報でなく、情報の基礎部分をしっかり教育すると、非常に特徴のあるものができると思います。特に数学あたりのところでしっかりした情報基礎教育をやられると、よい特徴がでてくると思います。私が受けているイメージは、高等学校で理数科を持っているところがありますが、そのイメージで情報コースが出てきているとも思っています。

中川委員

どんな科目を実施したらよいかについては、先日福井大学で習ってきたところです。

橋詰委員

総合産業高校ですが、できたら地域性、特色のあるものが望ましい。ここ奥越をはじめ県内各所で同じような総合産業高校を同じようなパターンで作っていくと、真似たという感じがする。奥越には奥越としての特色を導入し、逆に奥越に近いところから生徒が来るような感じのものを取り入れるようにするとよいと思います。

ここでは、工業で機械科、電気科などが挙がっていますが、他の地域との兼ね合いで何か色分け、特色付けはどうなっているか。他の地域では再編は始まっていないのではっきりできないかもしれませんが。なるべく奥越らしいものを、嶺南行ったら嶺南らしく、丹南は丹南らしいものを、というのが望ましいと思います。どうでしょう。

中川座長

学科構成の大まかな提案が出されていると思いますが、そこで教える内容についてはまだこれから詰めていくことと思います。何か今、奥越の特色を出す、地域性を出すということで考えておられることはありますか。

広部教育長

奥越の総合産業高校につきましては、高間協でもいろいろ議論がありました。ひとつは、他の学校にないものとして福祉科がある、これをどのように定着し伸ばしていくかが話題になりました。それから、電気科と機械科ですが、これについても他の工業系高校の学科名を見ると、いろんな名前がついておりまして、ちょっと分かりにくい。それぞれの工業高校の学科の自主性に任せていた点もあるわけですが、逆によく分からなくなってしまう点もあるものですから、これは、純化して基本に戻ったほうがよいということもあり、電気と機械という形にしました。ビジネスにしましても、議論となったのは、今後奥越の、特に観光などをどのようにして学科構成、カリキュラムの中に取り入れていったらよいかなどが話題になったわけです。そういったことも視点に置いて進めたいと考えています。福祉の部分も、今後どのように展開していくかが課題のひとつとなっています。

もう1点、建設部門ですが、従来、大野におきましては、真名川の開発であるとか大きな災害復旧等があり、建設業関係の業者がたくさんあると、そういったこともありまして、建設コースが設置されていたわけです。しかし、先ほどの説明にありましたように、その希望者が少なくなってきた。就職先にしましても非常に少なくなってきた。これをどうするかということでございます。この案におきましては、建設コースを省いたらどうだということになっております。その部門を機械とか電気でカバーできるのではないかと案になっておりますが、今、地元のPTAとか特に同窓会の方からは是非とも残して欲しいといった要請がございまして、しかし、この部門につきましても高間協でいろいろ議論した中で、このような方針になったわけです。来年卒業される中学校の生徒さんの志望がどうなるか、どう動くかということが大きな一つの目安でございまして、この9月にも生徒の進路志望調査が具体的に行われる予定ですので、状況を見ながら考えていくべきかと思います。

また、奥越の総合産業高校は、県内で初めてのケースとなりますので、23年に開設する際に校舎のリフレッシュ・整備をする必要があると思います。これから来年度の予算編成に間に合うように考えまして、来年1年かけまして、必要なものは予算要求して、ふさわしいものに整備をしていきたいと考えております。

吉田委員

私たちが大野高校に通った頃には総合高校でして、普通科、商業科、農業科、家庭科というものがありませんでしたが、私たちのときに家庭科がなくなりました。ということで、女子のコースクラスが2つありまして、ひとつは以前の家庭科、間に合うような、というコースがありました。農業科のところでは、林業と農業という2コースの中で、大野の特産、あの頃は筍の缶詰を実習で作ったりとか、林業の人たちは測量などを学習して公務員になられた方もたくさんありましたし、福大へ入学された方もありました。あの頃には、長男であると、農業科へ勉強ができて進学した、私たちの30年代の高校はそうでした。

食の安全・安心という意味から、坂谷の高原野菜というのが、生で食べてみると他のものとは全然違うという反響を最近よく聞いております。今日の、大野らしさ、奥越らしさを出すということにおいて、食の安全・安心を発信できる学科もあってもよいかと、福祉コースの中で食物の観点から、実習田、畑というか、また鶏のブロイラーをクリスマスに市民の方に販売しているなど、特徴を出した高校のニュースを見ると、大野にも、よそから来てもらえるような、魅力ある高

校になるといいと思いました。

福井の高校へ通学される生徒さんの姿を6時台の越美北線に乗ったときに見ました。客のほとんどが高校生です。そのときに、朝食を食べてこないということが分かりました。コンビニのおにぎり、パンを食べている人、手作りの弁当を車内で食べている人もありましたが、ほとんどがファーストフードであったように思いました。越前大野の駅まで家族に送られてきて、福井の高校で授業を受けて、夜の弁当も持参しているということを市内のお母さん方から聞いています。食の安全・安心から考えると、今の時代、そういった弁当はほとんどファーストフードになるのではないかと。

私たちの友達から、お孫さんたちが、親のエゴで福井の高校を受けるようにしている姿もあると聞いています。子どもが中学校のときのクラスから分かれて高校へ行ったときも一緒に卒業したとき、福井のいろんなところから集まった人と一緒に、大野なり勝山なりの高校を出た方がいいという話も聞くことがあります。それぞれの学校の特徴を見て、家族全員が納得して進学されて登下校のエネルギー、弁当、食事について理解して行っているのであればいいと思いますが、もう少し子どもの本当の気持ちを聞かれたほうがよいのではという話を日常聞いています。

山田委員

再編の校区のクラス数を見てみますと、大野高校、勝山高校、新しくできる総合産業高校と、各5クラスでバランスがいいように見えるのですが、内容を見てみると、大野高校の普通科が6クラスから5クラスと1クラス減り、勝山高校の普通科が4クラスから5クラスになるということで、1クラス増えるという形になっています。

各生徒がそれぞれの地元の高校を志望した場合、勝山の子どもは勝山高校に入りやすいと思いますが、大野の子どもは非常に大野高校に入りにくい。かなりの数が勝山高校に流れていかないとバランスがとれないということになると思います。

これを繰り返していきますと、ある程度入りにくい高校というのは親御さんたちの不満もたまりますし、同じ地元の高校に行きたいのにわざわざ遠い高校へ通わないといけないということも中学校の先生方も指導していかないと、高校受験がうまくいかないということも発生するでしょう。ある程度年数が経つと、進学率などいろんなことにも影響が出るのではないかと。そういうことになってくると勝山の子どもさんも進学率のいいところを目指して、というような逆転現象、それがだんだん高校の格差といいますか、同じクラス数にする、人口に対してアンバランスなクラス数にすると、そういうことが起こってくるのではないかと心配しているのですが、そのことについてはどう思いますか。

中川座長

大野高校と勝山高校の想定人数が180人で同じになるということですが、中学卒業者数の推移で、協議資料1の2ページを見ますと、中学卒業者の人数の変化が大野市と勝山市で見られますが、大野市の方が少し多いという実態はあります。ただ情報コースというのをどういう風に考えるのか、というので話は変わってくると思うのですが、そのことについてはどうですか。

広部教育長

どうしても大野高校と勝山高校の比較になってしまうのですが、学級数につきましては、今こうだからといって、将来もこうだということではありません。ちなみにこの近年、大野高校は1昨年から昨年にかけて、高校の募集数を20数人落としました。これは落とさざるをえなかったわけです。中学生の卒業の進路の希望によっても、落とさないどうしても欠員が出てしまうということで、中学

校3年生の進路希望、それから数といったものにはどうしても左右されます。

たまたま今バランスを欠いておりますが、中学生の進路志望等を見て、大野学校への希望者数が増えれば増やします。それから勝山高校についてはどうしても勝山南が統合されるということで、従来の勝山南高校に通っておられた全体の数を見ますと、1クラスくらいは勝山高校につけなければニーズを達成することはできないだろうという思いがあるわけです。

今はそうであっても将来的に必ずそのままでいくかといったらそういうことではありません。必ずしも学級の数ということについては、スタートはこうであっても将来もずっとこうだということにはならないと思います。

中川座長

今の問題は重要な問題を含んでいると思ひまして、大野高校と勝山高校の学級数の問題なのですが、これは1、2年で出発するにしても、当初からすでに問題があるようなので、検討していく必要があります。

平沢委員

2点お願いします。先ほどから出ておりますように、生徒の一極集中、福井へ生徒が集まるような傾向にありますし、その傾向はこれからも収まらないのかもしれないと思いますが、藤島・高志の定員は変わらずに、周辺校の生徒数だけが減るということはないのですか。全体が下がるのであれば、それぞれがそれぞれの地区に、という感じなのですが、藤島・高志だけは同じ定員数でいきますと、おのずと周辺部からそちらの方に集約するというのは有り得るのかなと思います。奥越に限らず、全県下それぞれの地域において適正な数が必要であるというような考えで、今後進めていただきたいと思います。

次に、職業系の高校の件ですが、先ほどから何名かの委員の方がおっしゃられているので重複するかもしれませんが、県内にも先進的な取組みをされている学校もあるとは思いますが、保護者としますと、どうしても現状は点数でやはり切られるというか、何点までだったら勝山高校あるいは大野高校だと。じゃあそこに達しないからこの学校だという決まり方をしている中で、なかなか生徒が魅力ある高校を選べていないという一面もあるのではないかと思います。たまたまテレビなどで、県外で極めて先進的な取組みをされている職業高校を見たことがあります。例えば調理師の養成をする高校で、高校独自のレストランを経営してそこで卒業した生徒は割烹料理とか一流ホテルとかに出されるという事例ですが、林業関係であると木工関係ですが、高校でもそこに入りたいという生徒が多くいるというお話もございまして、この学校なら行きたいという職業系の高校になれば、奥越であっても、多少福井に近い松岡・永平寺、あるいは美山地区の生徒が、こちらに向いて通いたいということにもなるかなと思います。当然、県教委では十分考えておられると思いますが、福井県全体の職業高校の検討の中で、あれもこれも職業高校で集約しようとするストレスになると思うので、本当の意味での特色ある学校づくりに取り組んでいただきたいと思います。

中川座長

ありがとうございました。ほかに御意見はございませんか。

山田委員

先ほど説明受けました、勝山高校の情報コースですけれども、これはなぜ勝山高校だけで大野高校にはないのかなという問題がひとつ。もうひとつは、通学のことを考えますと、なかなか大野・勝山間は近いようで交通の便が非常によくない。特に冬は雪が降りますし、通うということにかなりストレスを感じる。最近大野高校を見ても、冬の間、親御さんが車で送っていくというのが多々見受けられるのですが、そういう形になると、勝山まで送るとなると、結構父兄の方から不満が出てくるのではないかと。やはり、基本的には、大野に4万弱、勝山に3

万弱と人口にかなり差がありますので、普通高校を両方残すのであれば、クラスは人口比に合わせた形で残してほしいと。両方一緒というのは、大野の父兄さんから、特に普通科を志望する父兄の方からはかなり苦情が出てくるのではないかと。逆に職業系については全部大野になりますので、いろんなことで議論は巻き上がる可能性はあるのですが、やはり普通科を両方残すのであれば、ある程度奥越というくくりで格差ができること、入りやすい、入りにくいということは問題があるのではないかと。どうしても大野の父兄のことを考えると、一部どうしても勝山に行かなければならない。これは選ぶのではなくて、中学校の指導で、ある程度点数分けということも出てくるでしょうから、県立高校を落ちるわけにいかないということで、そうすると区分けを最初の指導でどのようにするのか、そのニーズを見ながら、ある程度必ず普通高校を志望する人は、大野にいながら勝山に行かなければいけないということで、初年度からかなり問題が起きるのではないかと。

何年か後というのではなくて、初年度をどうするかということです。それが非常に難しいのではないかと。いきなりこういう形というのは、情報科は別にしても、勝山は普通科4クラスのままですから、プラス情報科ということで、結局勝山は全然変わらずに、情報科がプラスになるというようなことになると思います。情報科が分かりにくいということはありますが、何か5クラス合わせるために無理矢理しているのではないかと、普通高校についてはこの案はかなり問題ではないかと思えます。特に初年度あたりが大変ではないかと。指導される中学校の先生方も進路指導の先生方もかなり大変なのではないかと。その辺をどのように整備していくのかなということです。

中川座長 教育長、何か考えがあれば。

広部教育長 今の御意見は、高校からもいろいろ聞いておりますので、私の中で整理をさせていただいて、またこの後、各高等学校に部会も設置させていただきますので、議論して、次回に説明させていただきたいと思えます。

それから、特に大野高校、勝山高校の普通科につきましても、現状の分析と今後どう伸ばしていくかということも重要な議題と思ひまして、今回委員の中にベネッセコーポレーションさんにも入っていただき、必要であれば今後また現状分析の上、どうしたらよいかという御指摘もいただきたいと思ひます。

中川座長 その答えで今のところよろしいでしょうか。大野高校は、現在215名の入学定員のところが180名になると。もちろん総合産業高校が大野に来るという面はあるのですが、やはり普通科志望の学生のことを考えると、もう1クラス大野高校にあってもいいのかなというのが普通の考え方だと思うのですが、その辺はまた検討していただくということでよろしいでしょうか。

勝山高校の情報コースというのは、僕らは非常に期待するのですが、新しい形の進学コースということで、わが国の情報分野、情報のハード面は非常に先進的にやっているのですが、ソフト面でいろんなところで負け続けているというところもあって、高校生段階からその辺のところをきちんと学び、将来若い技術者が出てくるということには大きな期待があつて、そういう意味で、情報コース、新しい試みをやっていただくのは非常にいいのではないかとという風に思ひます。

もうあまり時間がなくなっているのですが、ほかに何かありますか。

橋詰委員 時間がないところ申し訳ないのですが、今のお話に関連付けて、こういうことを考えられるかどうかわかりませんが、この検討会議の趣旨は奥越の魅力ある高

校づくりということです。高校が3つになるわけです。この広い地域で3つの高校があるということです。大野高校と勝山高校で一緒に学校、職業系の学校、他の地域の職業系と同じようなものを作っていくということでは、これからの新しい魅力ある高校にするというのはなかなか難しいと思います。

今、情報コースが勝山にあってなぜ大野にないのだという発想があるのですが、大学などではよく大学間の互換性の単位をとということも考えられます。高校でそういうことが可能かといえばわかりませんが、そういう道を拓くとか、3つの高校の連携ということをよく考える。地域は広くて交通の便は悪い、勝山から大野に来るのが不便だということになれば、定期的にマイクロバスを回すとか。生徒数が減ってきていることを考えると、特色ある部活も大事だと思います。勝山高校の何々部は非常に強いということになれば、他の地区学校から是非そこでやりたいという学生がくるよう、多少そういう部を考えると、そういういろんなことを相互に連携してやれるような部門をどこかに設けておくということも考えられないことはないと思います。3つの高校の持ち味をもう少し高めることによって、奥越地区全体の魅力が高まっていくと思っています。こういうことは、高校で大学のようなことはできないかもしれませんが、考えられないことはないと思います。これから、別の高校の部会で検討会があるということで、そこで話し合ってもらえばいいのですが。この部については共同でやろうかとか、この運動部については一緒にできないのか、と思っています。

中川座長

その点も含めて専門部会の方で検討していただけたらと思います。連携もうまく組めればいいのですが、連携が先に立って、連携しなければいけないということになってもいけない感じもするので、慎重に検討する必要はあると思います。

時間がなくなりましたので、ここで一応議論を打ち切ります。今回出された御意見の中で、地域性とか特色が何とか出せないかという話がありました。これに関しては、総合産業高校には総合選択制が提案されていまして、その中の選択教科に、奥越地方の特色あるもの、仮に電気や機械であるにしても産業界の特色をうまく組み込んだ科目を入れていく。それから、御提案のあった食の安全であれば、実習田を整備してはどうかという御提案もいただきました。それから普通科高校に関しては、大野高校と勝山高校のクラス、入学定員をもう少し検討しなおして欲しいということ。勝山高校に関しては情報コースの中身をもう少し明確にして、高校を卒業した生徒が将来どうなるのかというところまでの見通しを立てる必要があると思います。

職業系高校というのは、本来、高校生段階で職業訓練、いわゆる技能を身に付けて、そして中堅技能者、中堅の職業人として社会に出て行くのが本来なんでしょうけれども、現状では、半数が高等教育機関へ進学していることもあって、その現状を踏まえた案になっていると思います。ただ、やはり本来は職業訓練というか、広い意味での技能訓練がしっかりできるように、実習施設、実験施設などの教育環境をしっかりと整えていくことが重要だろうと思っています。

中身の詳しいことに関しては、それぞれ専門部会の方で検討するというので、今日はこれくらいでまとめておきたいと思います。それでは、これで終了したいと思います。進行を事務局にお返しします。

○閉 会

教育政策課長

貴重な御意見をどうもありがとうございました。本日の議事録につきましては、事務局で整理いたしましたものを、県教育委員会の教育政策課のホームページに掲載してまいりたいと考えておりますので、御覧いただきたいと思います。

今後のスケジュールについて説明させていただきます。今後、この検討会議は、

今年度中に3回程度開催したいと考えております。また、次回は、本日いただきました御意見であるとか、資料の中にもありました、各高校の専門部会での検討を踏まえまして、奥越地区の県立学校の魅力ある在り方について、さらに深く御議論をお願いしたいと思っております。

また今後、資料を作成する都合上、事務局が各委員の皆様に御意見を伺うこともあるかと思いますが、よろしくお願いいたします。

それでは、第1回会議はこれで閉会とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

- 以 上 -